
勘違い

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勘違い

【Nコード】

N2488B

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

日本狼の妖し叶利かなぎと術者実嗣のシリーズ。ある意味レンタルビデオショップの罠かも？

(前書き)

十一十一十一【勘違い】をお読みになられる前に十一十一十

作品中でゴスロリ風の女の子に対してキャラがマイナスのイメージを持つ描写がございますが、私自身は全くそういう方々に対してマイナスイメージはございません。

また、キャラがそういう思いを抱くに至った理由として以下に何点か理由を挙げさせていただきます。

1. キャラの活躍した時代が平安時代までさかのぼること。
2. キャラは最近目覚めたばかりなのでずっと時の流れを目にしていたわけではないこと。
3. 作中には書き漏らしていますが、目覚めたばかりの頃は洋服にすら違和感を覚えていたこと。

キャラの特異性が、ゴスロリ服を見て妙な格好だ、と思うに至った理由であり、その他の意味は含まれておりません。

もしもゴスロリが大好きな方で上記内容を見て私は読まないほうが無難かも?と思われる場合は先に進まれないことをお勧めします。

重ねて申し上げますが、私自身はゴスロリとか大好きなんです。(※≧≡≦※)○

だから、これを読んで不快な思いをする方がいらっしやらないといいな、と切に願っております。

また、今回この作品のせいで少なからず不快な思いをされた方が

いらっしやるのも事実です。

ここに陳謝してお詫び申し上げます m () m

鷹槻れん

ここ数日間、絞れば水が出るのではないかというほどじめじめした天気が続いている。

見上げる空は相も変わらず暗い鼠色。目を凝らしてみるまでもなく、雨が地面を叩く音も聞こえている。

いわゆる梅雨の長雨というやつだ。

基本的に体を動かせる屋外のほうが好きな実嗣さねつぐだが、こう天気が悪いとさすがに家から出る気がしない。

雨に負けて、もともとサボりがちの高校からも足が遠のいてしまっている。かれこれ一週間、家から一步も出ていない。

「ご丁寧なそんな実嗣に付き合っただけで一日中家で過ごしている相棒——叶利——には、こんな単調な日々、そろそろ限界のようだ。」

この叶利、実は実嗣に仕える妖怪である。

今現在学生をやっている実嗣には余り縁のない能力なのだが、叶利の言を信じるならば自分には並外れた霊力が備わっているらしい。叶利は、実嗣のそんなパワーに惚れ込んで自ら進んで使役されている節がある。

「マスター。面白い番組なくなっちゃいました」

何故かNHKの教育番組がお気に入りなの叶利だったが、午前十一時以降の番組は余り好きではないと見える。

九時から始まる人形劇や道徳番組はおとなしく見ているくせに、いつも昼前になるとそんな風にぼやいては実嗣を悩ませる。

日本狼の変化へんげだと豪語する叶利は、その言葉の通り、浅黒い肌にくちくちい大きな耳、それからふさふさの尻尾を持った青年の姿をしている。それだけでも異質なのに、左目の下から頬にかけてざっくりと傷跡のオマケまでついているのだから堪らない。

さすがにその姿のまま外出させると大騒ぎになるので、最近では耳と尻尾を人間のように化け直させることを覚えさせた。

実を言うと同じ最近までは実嗣が何度注意してもありのままの姿で外出していた叶利だったのだが――。

＊

「きゃー、可愛い！ それ、何のコスプレですかあ？」

中世のヨーロッパ風フリドリドレスに身を包んだ女の子二人に、キラキラお目目で取り囲まれて以来、さしもの叶利もちょっぴり懲りたのだ。

彼女らの、余りにも奇をてらった格好――叶利が思うのも何だが――に一瞬 気圧けおされて、彼には珍しく異性を前に口説き文句のひとつも放てずに尻尾を巻いて退散してしまった。

「こすぷれ」って何だ？ と思って一緒にいた実嗣に聞いたら「お前のような格好のことだ」。そう返された。

色々調べてみて分かったのだが、彼女たちのような格好も、「ごしく・ろりーた」とか言って……「こすぷれ」なるものの一種であるらしい。

自分と彼女たちの間に流れる共通点は叶利にはよく分からなかったが、要するに他者から見ると自分も妙ちきりんに見えるということか……。

女の子なら来る者拒まず、去る者追いまくり……が信条の叶利だが、正直彼女たちにはひるんだ。

というのも、彼女たちは叶利の傷跡や犬耳、ふさふさ尻尾を見て色々とあらぬ妄想をしてくれたようだから。

きやあきやあ騒ぎながら交わされる「犬耳ちゃんが攻めだろうね。あの怖そうなお兄さん、きつとベッドの上ではむっちゃ可愛いんだよ」とか、「うそお。私は絶対犬耳ちゃんが受けだと思うよ。あの傷跡に優しく触れられたりするとね、すごく感じちゃうんだよ、きつと」とかいう会話は、ちんぷんかんぷんだった。

実嗣に「受けとか攻めとか……どういう意味っすか？」と聞いたらブスツとした顔で「知るか」と吐き捨てられた。

あの顔は絶対知ってるに違ちがえねえ！ と思ったけれど、そんなとき

の実嗣はどんなに食い下がっても一切情報を提供してくれないのが常なので、潔く諦めた叶利である。

後になって、あれは一部の女の子たちの間で流行りの「ぼーいずらぶ」とかいう男色思考に基づく用語で、攻めが男役、受けが女役——もちろん男同士で！——を意味する恐ろしい妄想世界の産物だと知った。

実嗣が不機嫌になるわけだ。

もちろん、女好きの叶利としても「頼むから非生産的な幻想は勘弁してくれ」と思ってしまう。やっぱり身体を重ねるからには子供が出来なきゃ意味がないというのが率直な感想だ。

絶滅してしまった日本狼の变化^{へんげ}だからか、叶利は人一倍種族維持本能が強かったりする。女好きたるゆえんだ。

やっぱり抱くならまるやかな線の女の子のほうがいいし、言うまでもなく男に抱かれるなんつーのは真っ平ごめんだ。

そんなわけで、最近では変な妄想のターゲットにされずに済むよう、ちゃんと実嗣の言いつけを守って外出している。

しかし、人間に見えるよう化け直してみたところで、叶利にはまだまだ目立つ要素がたくさんあった。

白銀色の髪や、浅黒い肌、それから頬の傷、長身……など。

Tシャツにジーンズというラフな格好で外に出ると、却って素の魅力が引き立ってしまい、図らずも周囲の目を引いてしまう。

「も、もしよかったらお茶でも……」

意を決したように声をかけられることもあれば、

「ねえねえ、暇があったら付き合ってよ」

なんて具合に軽い調子で声をかけられることもある。

最初のうちは、最近じゃ女の子のほうから平気で男に声をかけられる時代になったんだなあ〜と思って嬉しくなったものだ。向こうから声をかけてくれるのなら、いちいち「俺の子供生んでくれねえか？」と誘う手間が省けるのだから。

これなら子作りだって楽勝だぜ♪

満面に笑みを浮かべて実嗣にそう話したら、今の時代、そんな簡単に孕ませたりしたら養育費やら何やらで面倒なことになるんだぞ、と脅されてしまった。

何だかよく分からないが、居候の身なので涙を吞んでそれらの誘いを断ることを決意した。きつと、ちよつと前なら手当たり次第に「頂きやす！」になっていたと思うのだが――。

何だかやりやすいような、やりにくいような……微妙な世の中になったものだ。

だから、できれば外出は一人ではしたくないというのが最近の叶利の考えである。

実嗣と一緒に居てもヒソヒソと何かを言われたりはするが、声をかけられる確率はガクツと落ちるので断然楽なのだ。

きつと実嗣の、いつも怒っているような顔つきが、厄除けになっているんだらう。

＊

「マスター、俺、退屈なんっすけど……」

そんなわけで、今日こそは何とか実嗣を外に連れ出したい叶利である。

数百年くらい前は山にある洞穴に住んでいた叶利だ。もともと濡れるのはそれほど苦手じゃない。

「……俺はそうでもねえけど？」

外出しましょうぜ、という気持ちを込めて投げかけたセリフに、カラー写真満載の本から目を上げた実嗣が、つつけんどんな声音でそう返す。

学校をサボっていることから想像がつくかも知れないが、実嗣はここいら界隈かいわいでは不良青年で通っている。

別に暴力沙汰を起こしたとか、そういうことはないのだが、三白眼の険しい目つきと、人を寄せ付けない態度のせいでイメージだけが先行しているのだ。

そんな実嗣だったが、外見に似合わずかなりの甘党だったりする。

最初のうちは店で買ってきた既製品で満足していたのだが、最近では手作りに凝っている。

叶利としては「旨いもんが食えりゃなんだっていいや」なのだが、そんなことを言おうものなら「味の分からん奴にゃあやれん」と取り上げられてしまうので黙っている。

「マスターは食いもんのこと考えてりゃ時間つぶれるんでしようが、俺、することないんすよ」

「別に俺に付き合って部屋にこもってなくてもいいんだぜ？」

だから一緒に外出しよう！と誘ったつもりだったのだが、実嗣には叶利の気持ち伝わらない。レシピ本のページをめくりながら気のない言葉が返ってくるだけだった。

「俺一人じゃその……何つうんでしたっけ？ 逆ナン？……とかそういうのに対処できないんすよお」

別に対処できないわけではないのだが、声を掛けられること自体が面倒くさい。

「じゃ、狼の格好して行けば？ どうせ普通の奴らにゃ犬にしか見えねえはずだし」

確かに叶利を見て狼だ！と分かる人間のほうが少ないだろう。しかし――。

「その格好じゃどこにも寄れねえんすけど……」

大きな犬――もとい狼――が一匹で歩くには、現代の街は世知辛い。下手したら保健所に連れて行かれるかも。

「……だからお願いしやす！」

実嗣の手にした本を引っ張ってのけると、片手を顔の前に出して拝み倒しのポーズをとる。普通、こんなことをすれば逆効果になるが、実嗣には案外優しいところがある。

「……ったく」

「しゃあねえなあ」。

頼まれると嫌と言えない性格を熟知しての相棒の作戦に、まんまと引っかかった。

面倒くさそうに頭をガシガシやってから、おもむろに立ち上がると「川西のレンタルビデオショップでいいな？」

好きな映画、何本か選ばせてやるからそれ観ておとなしく過ごせ。そう言うことらしい。

「へーい♪」

とりあえず、付き合ってくれる気になったらしい実嗣に、にっこり笑う叶利。口の端に覗く鋭い牙も、こういう表情のときは八重歯のように見えた――。

＊

家を出ると、幸いなことに雨は小雨になっていた。

「このぐらいの雨なら濡れて行きましようや」と言って手ぶらで出る叶利に、実嗣は「冗談だろ」といって傘を手にした。

結局雨は歩いているうちにやんでしまったので、内心にんまりした叶利である。

口数の少ない実嗣に並んで歩きながら、久々に外のおいを満喫する。

胸一杯に吸い込んだ空気は、先ほどの雨で冷やされていて心地よい。

雨が降ると、排気ガスやら何やら汚いものが洗い流されるのだろう。晴天続きの埃っぽい空気より、雨上がりのあとの空気のほうが、叶利は好きだった。

＊

実嗣が最前に行っているレンタルビデオショップの名は「オーディオビデオ倶楽部」といった。

個人経営の、間口の狭い小さな店舗である。チェーン店などのような大型店舗と違い、滅多に他の客と出会わないのが実嗣のツボにはまったらしい。

このショップ、その名のとおりCDとビデオをレンタルすることが出来る。最近では時代の流れなのか、DVDも扱い始めたが、数としてはまだまだビデオのほうが優勢だ。実嗣の家にも、DVDを

見られる媒体としてパソコンがあるが、叶利には操作方法がよく分からない。

だからビデオを借りて帰ることにした。

店の隅にある、カーテンで仕切られたコーナーには絶対入るな、と実嗣に念押しされて、キッズコーナーに立っている叶利である。

あのカーテンの向こうに何があるかぐらいお見通しなのに――。

「お前にゃ、まだ早すぎる」

そう言って頬を赤らめ、顔をそむけた実嗣に、「俺のほうがかなり年上なのになぁ」なんて思ってしまった叶利。でも実嗣のそういう純情なところも結構気に入っているので黙って従うことにした。

第一他人がよろしくやってる姿を見たって面白くない。セックスなんて、自分がやらなきゃ楽しめねえだろ？

それが叶利の率直な感想だ。人間はどうしてあんなもんを見て喜べるんだろう？ 狼だからかもしれないが、叶利にはその辺がよく分からない。絶対こっちのコーナーのほうが楽しいのに。

そんな叶利の最近のお気に入りにはNHK教育でやっている、「ニヤッキ！」というクレイアアニメ。タイトル通り、ニヤッキと言う名の芋虫が出てくる、一話一話二分足らずのプチサイズのアニメだ。

実嗣に子供っぽいと言われてしまうのだが、好きなもんは仕方ない。

ふと見ると、「おかあさんと一緒」などにまぎれて「ニヤッキ！」という文字の描かれたビデオが目に入った。何と四巻まであるではないか。思わず感激！の叶利である。

迷わずそれらを手に取ると、実嗣の元へ向かった。

CDコーナーで「B', z」を矯めつ眇めつしている実嗣に、「これ」といって手にしたビデオを見せると、案の定眉をひそめられた。だからといって、実嗣は決して「別のしろ」とは言わない。

「もう一本なんかねえのか？」

叶利が手にしたビデオから興味をなくしたように目をそらすと、

ビデオコーナーを指差す。どうやら五本借りると安くなるらしい。ちよっと迷ったけれど、やっぱりキッズコーナーからもう一本選ぶことにした。

悩んだ末に手に取ったのはディズニーの「リロ&スティッチ」。何だかよく分からないが、叶利好みの妙なキャラが出ているのが決め手だった。

叶利からビデオの入ったカゴを受け取ると、レジに並ぶ実嗣。結局彼自身は何も借りないらしい。

そこでふと思いついたようにパスケースと、料金の一〇五〇円を取り出すと、叶利に手渡す実嗣。ついでにカゴも押し付けた。

「……自分で借りろ」

レジ待ちをしていて恥ずかしくなったのだろう。何せ、カゴの中身はキッズ向けのアニメばかり。無理もない。

渡されたパスケースの中にはこの会員証が入っている。学生証とバスの定期も一緒になってはいるが、カード一枚一枚が半透明なフィルムの中に入っているのも、そのままの状態でも十分バーコードは読める。だから実嗣は、いつも会員証をケースから取り出したりせず、それが入っている箇所を開いて店員に手渡しているのだ。

要は面倒臭がり屋だから。

何度か実嗣と一緒にここへ来たことがある叶利は、そういうのを知っている。で何の疑問もなくそれらを受け取った。

実嗣に渡されたパスケースを手にはレジに並びながら、会員証が入っている箇所を指を挟んでしおり代わりにすることも忘れない。少しでも早く借りて帰りたいから。

長身の、頬に傷あり。ついでに髪も染めてます系の男——実際には地毛だが——が借りるにしている余りにもギャップのある作品ばかり。

店員が一瞬叶利とビデオを見比べたが、そんな視線にも気づかない様子で、今か今かと手続きが終わるのを待つ。ある意味幸せな男だ。

そんな叶利を横目に見ながら、思わず溜息の実嗣である。

無事レンタルを終えて店を出ると、先ほどとは打って変わって雨脚が強くなっていた。

「うわあ。こりゃ、濡れやすねえ」

傘を持たずに出てきた叶利は、濡れることを覚悟してそう言う。

「馬鹿。お前が濡れたらビデオも濡れちまうだろ」

しかし、予想に反して実嗣からそんな声がかかり、「ほら」と言
って傘が差しかけられたものだから驚いてしまった。

「……でもマスター。それじゃマスターが」

狭い傘に男が二人。

さすがに窮屈すぎてどちらも肩が濡れてしまう。

「ビデオが濡れなきゃいいんだよ」

何だかよく分からないが、そういうことらしい。

「ったく、恥ずかしいモンばっか借りやがって……」

叶利の手にした袋を一瞥して吐き捨てるようにそうつぶやいてから
「……」と。それよか叶利、傘持て。俺がビデオ持つから」

思いついたように付け加える。

どう考えても叶利のほうが長身なので、そのほうが効率がよい。

実嗣が、叶利にあわせて傘を差すと、手を思いっきり伸ばしたまま
にしなければいけないので辛いのだ。

「へい」

言われたとおり、傘を受け取ると、代わりにビデオを手渡す。

「行くぞ」

さっさと歩き始められて、あわてる叶利。

「男と相合傘してるトコなんざ見られたくねえんだよ」

確かに一理ある。

実嗣にあわせて歩調を速めた叶利は、手にしていたパスケースを
落としてしまったことに気が付いていなかった――。

＊

そんな二人のやり取りを、少し離れたところからゴシッククロリー

タの格好をした女の子が二人、キャッキヤ言いながら見ていた。

実嗣たちが歩き去った後、顔を見合わせて嬉しそうにパスケースを拾う。

それを開いて学生証を確認すると

「怖そうな目つきの彼、緑風高校の御霊谷実嗣くんって言うんだあ」

「もう一人は叶利くんって呼ばれてたよね？ 犬耳付けてなかったけど、カナちいって例の彼だよね？」

「うん！ 見間違えるわけないもん。あの二人だよ。何借りたのかなあ？」

「恥ずかしいものって言ってたから……やっぱり……」

「だよねえ？」

にんまり笑いながら顔を見合わせる少女達の頭の中には恐ろしい妄想ワールドが繰り広げられていた――。

＊

久々に雨がやんだので、実嗣は思い出したように学校へ行くことにした。

実嗣の父親は実は一年ほど前から仕事の関係で海外に行っていたりする。母は実嗣を産んですぐに死んでしまっていて居ない。

そんなわけで、もともと小さいころから鍵っ子だった実嗣である。今更親について海外に行こうなんて気にはなれなかったので、一人日本に残ることにした。

父がそれを許したのは、隣の家との関係にある。

実嗣、子供のころから生家であるここにいた時間よりも、隣の家で過ごした時間のほうが長いのだ。

隣の家は行潦外科医院という名の町医者をやっていて、一応専門は外科ということになっている。しかし小さな町の何とやらで、内科、小児科、精神科……求められれば何でもこなす。そんな場所になっていた。

実際、実嗣も小さいころには病氣や怪我をするたびによく世話に

なっていた。

実嗣の家が父子家庭で、父親の帰りが遅いことを知ったドクターの勧めで、父が家に帰ってくるまでの間、実嗣は行潦家^{にわたすみ}で過ごすようになった。

行潦家^{にわたすみ}には、実嗣と十ばかり年の離れた男の子と、更にもう五つ年上の女の子がいて、兄弟のように接してもらった。

現在、姉の若菜は家を出てとある高校で保険医をやっている。結局家のほうは弟の響^{きょう}が継いだ形だ。

先代は、響に跡目を譲ってから、看護婦として支えてくれた奥さんとともに、悠々自適の別荘住まいをしている。

「久しぶりだな、実嗣。お前、ちゃんと食事を摂ってるのか？ 菓子ばかりじゃ栄養偏るぞ？」

登校前に、先日借りた洋菓子のレシピ本を返そうと行潦家^{にわたすみ}に寄ったら、響に釘を刺されてしまった。

「いくらなんでも菓子ばかりは食ってないって。響兄^{きょうにい}心配すぎ！ それよりこの本、若菜姉^{わかなねえ}にバレル前に棚に戻しといてよ」

実嗣が、行潦家^{にわたすみ}のみで見せる、子供っぽい顔。言葉遣いも若干やわからめだ。

「ならいいんだが。ちなみに姉さんならもう気づいてるぞ？」

「え！？ 嘘……？」

「嘘だ」

「うわっ！ 意地悪い！」

＊

御霊谷家^{みくりや}の二階からそんな二人のやり取りを眺めて溜息をつく叶利。

異様に聴覚が発達しているせいで、離れていたって外の会話が丸聞こえなのだ。

実嗣は、未だに隣の響兄とやらに自分を紹介してくれていない。別に紹介して欲しいわけじゃないが、仲間はずれにされているみたいで面白くない。

オマケに相手が男だったりするものだから、その思いは俄然大きく膨らんで。

一人でも多く子孫を残したい叶利にとって、男という存在は——マスターたる実嗣以外——皆、ライバル。忌むべき存在なのだ。チツと舌打ちして窓から離れると、テレビのリモコンを手に取った。むしゃくしゃしているときは教育番組に限る。

テレビをつけてお目当ての局にチャンネルを合わせたと同時に階下から電話のけたたましい音が鳴り響く。

この家には子機なる便利なものが存在していないので、あれを黙らせるには下まで下りねばならない。

実嗣から「電話には出ないように」と言われている叶利。いつもなら言いつけを守って相手が諦めるのを待つのだが、今日は腹の虫の居所が悪かった。

「あーっ！ うるせえ！」

足音をとどろかせつつ階段を駆け下りると、思わず受話器を取り上げてしまった。もちろん、すぐに本体に叩き付けて切ってやるつもりだったのだが——。

『もしもし？ 御霊谷みくりやか？』

相手に先手を打たれてしまったからたまらない。

「あ、えっと……」

取るつもりのなかった電話。取ってしまうとしどろもどろだ。

「あゝ、は、はい、違うけど……そうっす」

自分でもわけの分からないことを言っている。背中にじんわりと汗がにじむのが分かった。

『……？ ……あ、もしかして実嗣君のお父様でいらっしゃいますか？ 失礼しました！ 私、実嗣君の担任をしております、緑風りよくふう高校の福山と申します』

（げっ！ よりによってマスターの担任かよ。あんまり変なことしちゃ、マズいなあ）

受話器をとってしまったことを今更のように後悔する叶利。悔や

んでいても仕方ないので、とりあえずここを切り抜けるのが先決だ
なと思い直す。

『失礼ですが、実嗣君は……』

マスターなら……そう、今日は珍しく学校へ向かったはずだ！

「マス……実嗣なら、今日は学校へ行くといっつてついさつき出かけ
やしたが……」

『あ、そうですか。実は……その……いや、やっぱり先に実嗣君に
確認をとってからの方がいいですね。わかりました。学校で彼を
待ってみることにします。どうも朝早くから失礼いたしました』

……何だか分からないけれど一方的に話されて……呆気なく切れ
た。

うまく誤魔化せたんだろうか。かなり謎である。

それにしても一体何だったのだろう？

「マスターってば、また何かやらかしたんかな？」

ここ数日間はずっと一緒にいたけれど別に何か悪いことをした感
じはしなかった。

しばし考えてみたけれど思い当たる節はない。

「ま、考えてもじゃあねえか。何かありや、きつと自分から愚痴る
だろ」

そう結論付けて、階段を上る叶利の頭には、もう教育番組のこと
しかなかった。

＊

「御^{みくりや}霊谷、ちよつといいか？」

ホームルームを終えると、担任が見計らったように声をかけてき
た。

「……？」

一週間連続で学校に行かないなんて、実嗣にとってはざらなので、
それで呼ばれたとは考えにくい。一体何の用だろうか？

それでなくとも今朝は叶利がパステスを落としてくれたせいで
朝からバタバタして気分が良くないのだ。これ以上の面倒はご免だ

った。

訝りながらも手招きされるままに教室の外へ出る実嗣を、クラスメートたちが腫れ物に触るような目で見送る。御霊谷のやつ、また何かやらかしたのか？ そんな雰囲気で――。

別に今まで他人に危害を加えるような真似をしたつもりはないが、実嗣、余りの欠席の多さに実は留年しているのだ。

年齢からいけばクラスメートたちよりひとつ年上。おまけに怖そうに見える（らしい）三白眼に、つつけんどんな態度。誤解されても仕方ないと自分でも自覚している。しているけれど「それは違う」と説いて回るのも正直面倒臭かった。

結局人間なんて多かれ少なかれ個々人の先入観で他者を見ているところがあるのだ。それに対してとやかく言うつもりはない。

ありのままの自分を見て、理解してくれる人間がほんの少しいてくれたらそれでいいんじゃないか？

いつもの癖で、またよそ事を考えてしまっていた。

「……おい、御霊谷、聞いているのかっ？」

その声に驚いて我に返ると、眼前の教師が、手にしたものを突きつけてきた。

「今朝学校にこれが届いたんだがな」

「あ、それ、俺の……」

見れば、実嗣がなくしたパスケースである。雨でドロドロになってはいるが、愛用の品を見まごうはずがない。

中に学生証も一緒に入っていたので学校に届いたのか。

これを失くしたせいで、今朝はえらく苦労させられたのだ。

正直バスに乗るのに定期がないのがあんなに不便だなんて思いもしなかった。

降りる段階になって財布の中に小銭がないのに気が付いて……間際に両替したら後ろの奴からヒンシュクをかってしまった。

帰りには気をつけねえとな。

昼に購買でパンを買うとき、札を出して小銭を作ったとか。

そこまで考えて、定期が出てきたのだから必要なかったっけと思
い至り、一人苦笑する。

「サンキュ。それが無くて今朝、すっげえ苦勞してさ」

実嗣にしては珍しく、礼を述べながらパスケースに手を伸ばすと、
寸前で引っ込められた。

「……オイ！ 何の真似だよ！」

それは俺のだ！

三白眼のせいで普通にしても睨んでいると誤解されがちな目
を更に細めて教師を睨みつける。

「まあ、落ち着け」

そんな実嗣の視線をもっともせず柔らかい声音で制すると、教師
はおもむろにパスケースを開いた。

「これなんだけどな」

レンタルビデオショップの会員証を指し示して声を低める。

「？」

それがどうした？

担任の意図が解せない実嗣は一瞬きょとんとしてしまう。

まさか会員証を貸せというわけではあるまい。叶利と違って身分
証明の出来る日本国民——しかも大人——なんだから、ビデオぐら
い自分で借りればいい。

不審に思って教師を見つめると

「御霊谷、お前が健全な男子だというのは先生も分かってるぞ。分
かってるんだがな、まだ……その、こういうところに行くのは早い
と思うぞ？」

はあ？

ますますチンプンカンプンだ。

レンタルビデオショップに行くのなんて何も自分でなくともみん
なやってることだろうに。

「どういう意味だよ」

教師の言わんとするところが掴めず混乱する一方の実嗣。

真っ直ぐに担任を見詰めてそう問いかけると、教師は少し周りを気にしてから思い切ったように声を低めて実嗣に耳打ちをした。

「AV倶楽部って……その、アダルトビデオ倶楽部のことなんだろう？　これ、届けてくれた女の子二人がお前とカナって子がここで恥ずかしいモンを借りて相合傘して帰って行ったって話してたぞ」

……ち、

……違うっ！

告げられた言葉に一瞬頭が真っ白になる。

そりゃ、小さな店だから眼前のこの男が実嗣御用達のレンタルビデオショップ——オーディオビデオ（audio video）倶楽部——の存在を知らなくても仕方ないかな、とは思う。

思うけれど……。

叶利との相合傘を誰かに見られていたことも十分ショックだったが、こういう破廉恥な誤解をされてしまったということのほうになりズッシリ押し掛かってきた。

ここにも自分を誤解している人間がいることを改めて自覚した実嗣。

面倒だが、自分の名誉に関わることだ。この誤解だけは解いておかねばなるまい。

【終】

(後書き)

最後まで読んでくださって有難うございました m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2488b/>

勘違い

2010年10月8日15時37分発行